わかたして。

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
わかたして。

【Ｎコード】
Ｎ１５７１Ｚ

【作者名】
白紙描写

【あらすじ】
もう、やけくそ。取り敢えず、目に付いたモノからバンバンネタにしていく物語。えーと、読者を困らす表現技法や滅茶苦茶破綻な辻褄で、構築していく天下統一の物語。文句があったら、バンバン感想を送ってくれ。わかった。本気を出して上げよう。

作者はもう病気だ。これ以上は、期待できない。（前書き）

登場人物かも

一ノ目一時（いちのめ　ひととき）

境地銃（さかち　さとる）

支持子子子（しもち　ししね）

只今三名

作者はもう病気だ。これ以上は、期待できない。

正直な所。まだまだ、俺の実力を知らない人間が居るようだな。

教えてやるよ。俺の実力を…

新世紀末期のこのご時世。誰もが、自分のことしか考えず、自分中心で地球上が回転しているのだと、言わんばかりなこの時代。

「シャーペンの芯をヤンデレの女子高生に、投げつけてやる！」

この場合のヤンデレは、ヤンキーなデレを意味する。

授業合間のひととき。

『一ノ目一時』は、大声と罵声半々で教室中に声を扇いだ。

凄い勢いだとは思わないか？

想わない。

俺はひょっとすると、中学生で受験生だ。

受験勉強と名の知れる絶対的境地。

に、立たされている。

それを観て、まぶだちの『境地銃』が

「凄い勢いだな。お前一人で、全国統一出来るんじゃねぇか？」

とほざく。

距離にして、八メートル。ぜんぜん聞こえない。

今世紀最大の冒険が今始まる。

この物語は、爪楊枝と杓文字とタワゴトと友情と遊女と崩壊的な勢いで、全国統一を行う物語だ。

まだ始まってはいない

新世界が見えた！

本当お困りな一時さん、今日も危険でいびつなオーラを羽織っている。

さとるは、いつもの席からはとを眺めるように、一時を眺める。雑巾とスリッパを持つながら…

「この場合、俺はなんとリアクションをとればいいんだ？」

さとるは、満面な笑みでこちらを凝視する。

怖すぎて、一時は体調不良に成ってしまいそうな域に達しそうだ。

大丈夫です。一時は、毎日体調不良な趣を魅せているから…

「雑巾を頭にがぶり、スリッパを使って、自分の頭をたたくんだ。そうしたら、頭がハッピーエンドするぜ」

この案は、暇を持て余す授業中に考えたヒトトキの案だ。

「ハッピーハッピ、ハッ八ぴー」

面白くもない。

言われるがまま、サトルは、頭を叩きつつ…

奇声を上げた。ハッ八ピーと…

「授業中だぞ。お前等、静かにしろ！」

と先生が怒鳴るが…

「先生…雑巾をスリッパで叩いてるだけです！誰も悪くありません！」

と僕らの味方、子子子は正論を並べた。
勿論、スリッパで雑巾を叩いてるわけではなくスリッパが雑巾に叩かれているという意味を孕んでので言の葉。

子子子は俺の嫁候補だ文句は、感想で言ってくれ。

「そうか。シシネ掃除長がそこまで行ってしまうのなら、致し方、わたくし先生も、先生が悪かったと言わざるを得ないな。済まない、ヒトトキ君、サトル君」

先生はチョークを阻んで、謝る。見た目、目線を遮るかの様に見えたその行為は、バカにしているとしか思えない風格だ。

「土下座しろよ。センセー」

わずかに、中学生まで残していた三十センチ物差しが役に経つなんて思いも寄らなかった。定規ですね。

土下座できない先生は、ただの公務員。
生徒に土下座できる先生は端っからの羞恥知らず。
俺的には、羞恥知らずな先生が良いな。固持的私的だけど…
と思ったのは、サトルの方でヒトトキではない。
「早くしなよ。先ん生」
と産声混じりの産声抜きな声をはびこらせ言うサトル。
「…」
圧倒的な権力の指圧を架けられる先生は、なすすべ無しと来たもんだ。
先生には、昔、夢があったらしい。
ずっと昔だ。
先生が今のサトルやヒトトキのように、無邪気なじゃれあいを淡々と貪っていた時だ。時代。
…おれ、大きくなったら、漫画家になる！
…え、良いな～俺なりたい！
島らま戸町とは、よく遊んだな。覚えてないけれど…

…バカ言え。俺が成るんだ漫画家に！
付け足して言うのなら、爪楊枝と墨汁だけでだ！！

…負けたよ…

島らま戸町は、よく諦めていたな。思い出す。

「私の負けだな…」

先生はゆっくりと、膝を下ろす。

期待はずれは免れたい。確信が持てるくらい先生が土下座をするのを信じたいと願う子子子はそこには居た。

クラス中わめき声しか、高らかと発していなかったはずなのにこんな時だけ、沈黙が発生するから…世間というモノは、ともシシネは思った。

けれど、ここは、この世界すでに、根本的な常識が狂ってるため、世間体もすでに無害。

先生は瞬く間に、学校のタイルと表面にコーティングされた透明体の表面に膝をつかす。

「先生はやる気のようだな。何つぅか。ホットしたと言うより安心した。」

とサトル。

何に？

何かは決まっている。これが現実で現実に出来るの世の中にだ。

ほっとため息をつくのも、俺とサトルと子子子だけ…後の残りは野次。範疇でもない。

膝をつかした先生は、今度は両手を学校の教室の床に起き始めた。無論勿論、土下座だ、これはそう、一種の習わしの様なものだ。四足歩行を繰り返すのではないかと言うくらいの態勢に陥っても良かろう。

いや違った。このまま、潔く土下座をしてくれるのだろうと言う淡彩な簡単な思いだけでは、そう簡単に土下ってくれなかった。先生はピタリと、動作を止めたのだから…

それと、連動して。

口が蠢く。

「だがしかし。一つ言わせてくれ、これは遺言や言い残す言葉と同等の意味付けだ、決して意味深で逃げ隠れするようなことばてはない。頼む。言わせておくれ」

ねだる。先生は哀れな眼差しでこちらを見る。

死ぬ訳でもない筈なのに、必死だ。

「どうする？

サトル」

堂でも良いことなので、まどろっこい選択はサトルに任せようと思う。

相変わらずと言っては何だが、サトルは相変わらず、清潔感のある潔白な雑巾を頭に乗せている。

「いい、良いよ。」

その通り肯定だ。

先生は、何かを決したかのように、何かを語り出す。

「先生さ、昔から先生になりたくてさ、…」

それは嘘。本当は漫画家になりたかった。これは子子子情報。

「それでさ、ずっと、ずっとずっと、先生が出す問題から授業から宿題まで、ずっとこなしてきたんだ」

それは嘘。ずっと、落書きばっかり書いてきた。

「そして立派に、先生になったけど、先生の人生は」

「…」

「…」

「…」

「無意味なモノだったと、言わせてくれ、無意味じゃないと言わないでくれ、無意味だなと言ってくれ、意味がなかったと自覚さけてくれ」

「これがおまえ達に言いたかった。正真正銘の授業だ。」

土下座をする。先生一人。

書くのも焦り焦りで一苦労

翳りに浸られた教室は蛍光灯で明るく照らせれていた。いつもの変わらぬ風景は、世ほどのことがないと、乱れない法則に従っている。

今のこの現状は余ほどのことだと言える状況下である。

先生は生徒に不服にも虐げられ従えれていた。

現状を維持するのは簡単。変えるのは難しい。俺たちはその異様を成し遂げたのだろう。

だが決してこれは、偉容では無いことだけは確かだ。

「しっかし。先生も先生だよな、授業を自由にしてくれるなんて…」

お前たちクラスには、授業なんて物を教えない。だから、一緒に先生の失ったはずの時間を取り戻してくれ。

なんて、腹をくくるも、先生らしさは残る言葉を言い席を譲ってくれた。

この場合の席は、教卓と生徒用机だ。

「センセーは野次と戯れているようだし、撓めてるし。よろし良いのではないか？」

俺の言葉だ。

よろしく無いのはこの狂った世の中。先生も義務を忘れるこの世の中。

期待され期待されない現実と一緒。

つまり、矛盾が世の中。

「観ろよ。先生楽しくやってるぞ」

先生は、鉛筆と紙と野次達とで、スゴロクパーティーを始めるばかりだった。始動される。

「嗚呼、貴方達ったら、陥れたり、新しい秩序を作り出す事しかできないの？
もっとまともに生きていたら、良いこと有っただろうに…」

残念がるのは、死期ナ梅雨。
みんなは梅雨と読んでいる。

梅雨は神出鬼没なあげく、怪しい携帯サービスネットに手を出すまでに至ったお人だ。

別に悪い人ではない。常識の範疇で歪んでいる人と言おう。

「あ、梅雨さんお元気立ったのですか？
先日は、空き巣に有ったとかでゴタゴメ立ったんじゃ…」

サトルはよく覚えているな。俺は忘れていたけど、今思い出した。
促された。

「嗚呼、大丈夫よ。その共犯者を正当防衛で殺めて、ついでに、当事者を連行したから…」

凄い。僕には真似すら似合わない事情だ。
それはそれでよしとしよう。人には人の個性とやらかな？
そんな物ばかりで溢れてんだし、

人金物情報に埋もれた世界ですよ。
全く、

「梅雨さんはお茶漬けに、つゆを投入しますか？」

投げ込むように、入れたりしないよね？

「少々」

やっぱ入れるんだこの人、とサトルは思ったと同時に隣のおれは…
答えて応じる人もそうだけれど、投入しないでしょう？…梅雨さん
何処のにその狂言が隠されていたか。始まりは、サトルの投入の一言。

今期に入って、色々いろんな事柄に直面してばかりだな。
例えば、割り箸の割り箸の大量生産がストップ。
既に手遅れだと思われていた地球温暖化ストップ。

アナログ放送再開。空気主力軽自動車水陸両用かに成功。

「お前変わってるな。ケチャップやカスタードなら、まだしも、ツユはないんじゃないかな？」

自分で訪ねて置いてその言い草はけしからんとは思う。
ある程度、サトルのセンスや性格は知っていたけど、ここまでエグる様な毒舌は初めて耳に入れる。

「ケチャップは合う人には会うって情報源のナクラナシラバシトナリげイドって番組で視聴したけど、カスタードは知らない。あと、ツユはよく合うし馬鹿にしない方がいいわ」

この人、情報が全てだと思っているけど、その通りかもしれないって、場面も人生上結構合ったから、その思想に否定は出来ない。俺が居た。

「へ、お前知らないのか？
何処かの奇人がお茶漬けにみりんとカスタードを入れて混ぜ混ぜして、食ってたって話を…」

「それはデマね。」

情報伝達の早い奴らだ。俺には到底適わないが…

「それより、何しにきたんだよ？
事情がないのなら、不登校っとけよ」

俺の言葉。正直本音を叩きつける。

学校の教室は、澄んでいて穏やかではない、何故なら先生と生徒が戯れるのが雑音にしか成らないからだ。
過半数は、遊んでいて、残りは読書ゲーム携帯慣れこなしテク紙飛行機使い丸閥ゲーム電卓など、様々だ。

その真っ直中。梅雨は

「事件が勃発したの、幼稚な意味で…」

と言いだした。
俺には関係ない話し。

「大変だね。梅雨　子ちゃん私がどうにかさせて上げようかぁ」

清掃委員長の子子子が現れた。彼女のキャラ設定を知るものは誰もいないと聞く

梅雨の背中にのし掛かる。
体重と重力で弾圧をかけようとしたのか、上手く行かずに跳ね返され、黒板のチョークとか置くところの角に頭を激突する子子子が居た。

瞬きを行う際の出来事で、何が起きたのかは、三割しか理解出来ていない。

「大丈夫か！？　シシネさん！」

甲高い棒読みで、視線だけを子子子に向けるサトル。興味がないのが分かる。

はっきり言って俺も興味がうつらだ。

「いた、い…」

痛いらしい。激痛以外の情報は得てないため、ここで梅雨は

「痛いのなら、痛いだけの事よ。」

その通りか、もし当たり所が悪くて、昏睡状態に陥っても、情報不足でただの気絶か、眠っているだけと判断するのが妥当。打算見積もり。

「髪の毛に、チョークの粉付いちゃった、梅雨さん、粉をのけてよ」

痛々しいくらい頭の上がぱっくりと開いて、頭蓋骨が見えた。

というのは嘘で、省がありませんことなどとほざき。頭を叩く梅雨さん。

テキトウという名の本気

頭にホコり
と言うが強ち嘘ではなかったらしい。真実を語っていただけらしい。
弱小な打撃を与える梅雨さん。
微動だにする子子子。
「何事もなくて何よりだよ。何事が起きたとしても楽しかった筈だけど…」
心なしか、サトルは作者のような意見を述べる。
しかし、一瞬の出来事だったし、対処も終え次の話題を持ち出す良い言葉はないか。とか思っている俺が居るし、子子子さんの存在感薄さにはびっくりだ。
世界統一まで何百年かかるか分からないペースで進んでいるよな。
勢いで書いて、尽きたって感じがしてきた。
多分恐らく、こんな結末に成るとは誰もが知っていそうだ。
それに、作者と来たら発想が貧困すぎて話に成らないし、話も作れない。参ったものだ。
「酷い言い方、後で、何かして悪戯してやるんだから！」
子子子は元気がいいな。威勢がいいのか？キャラも最初の当時と雰囲気違うし、…やっぱり、作者はキャラ設定やシナリオ作りが下手

くそな奴と分でも間違いなさそうだな。
適当な悪者を登場させて、主人公が倒していく…だけでも十分盛り上がるのに。
何時までも何時までも、無駄な会話や無駄なアクションを取り入れる…
ま、これも仕方ないだろうね。精神が崩壊する寸前まで来ていそうな感じしてるから…
「悪戯とは、何だ？
もしかして、貴方…」
横で話を直聞きしていた梅雨が疑いと訝しげな表情をし、ついでに眉を細めた。
「べ、別に、邪でいかがわしい事なんて、考えていなんだから！」
吃驚マークをよく使う民だな…まるで、一昔前のメールでも観ているようだ。
これは俺の思想。一々言わなくても良いのだけれども、一々言わせてくれ。文字数の反節約だ。現代人はアンチと言うのか？
「顔が赤くなっているぞ。しかも、旧石器時代のアニメのような感じで…」
旧石器時代、昔の人は、暇なとき、何を遣っていたのだろうか？
野球とかして、青春の汗をかいていたのかな？

スポーツで区切った方がいいな。スポーツをして、友情でも深め合ったのかな？
小学生の頃、大半引きこもっていたから、アウトドアな関係は知らない。

正しい意見は出来ない。

「何よそれ、まるで私が薄っぺらい箱の中に入っているようじゃない！？」

旧石器時代のテレビは画鋲で貼り付けていた、を定理してくれる一言だな…
俺の力学的では証明難しいが。

「聞こえなかった。なので、ひとまず、子子子は子子子らしく、梅雨にありがとうの一言を伝えろ。」

頭のホコリを落としてくれたのは、梅雨。
ホコリがついたのは、梅雨が突き飛ばしたから。

突き飛ばされた原因は、いきなり、子子子が抱きついたから。背後。

全ての元凶は、子子子にあった。

正しい道筋だ。
それの結果として、お礼を言うに当たるのだ。

間違ってはいない。少しおかしいだけだ。

ヒトトキは一人でに、納得した表情を浮かべて上の空だ。

「何よそれ、まるで、私の頭をなぶってくれてありがとう。私は痛いのが大好きなの。みたいに勝手な解釈を寄付してしまうじゃない？！」

ヒトトキは上の空だ。

「良いんじゃないの？
別に減少したり、絶滅したりする訳ではないしさ…」

動画のロードを待ちながら、お菓子と飲み物を口にするのが最も幸せと感じる一時だったと、今感じた。

それと同じく、痛みを幸せだと思える自分が居たら幸せだっただろう。

「何でも良いから、とりあえず、つべこべ言わず、礼を言え」

相手の意志を尊重せず、結果を出すため促す言葉。
これで反抗するのなら、何も言わない。

「分かったよ。頭を叩いてくれてありがとう。梅雨」

素直にひねくれた態度を見せる子子子。
全面的に全部俺が操作している。
何もない。何か期待しない。全国統一なんてものも無理。諦めない事が肝心なように、諦めることも必要。均衡を取れないと、崩れる。崩れてしまうのは、不安定な組み方をしているだけ。

「貴方…変態丸出しね。情報だと、貴方家でお兄ちゃんのエロ本を

観ていると言う話が時より、聞こえるのだけれども、本当なの？誠なの？」

二沢ではなく、一沢で攻める。強制と言うけど、この場合は確信と名の知れる語句が適切。

人前で、しかも男子が混じるこの場でその話を振ってしまえば、子子も羞恥を感じられる事になってしまうな。

助けるにも、助けれない立ち位置。

「？とぼけた方がいいの？」

認めるのか。そうだな、俺と言っても俺たちと言っても、男性はわずか二名だし、後はスゴロクに熱中してるし、大した激震では無いのかも知れないな。深読みのしすぎ、人は思ってたより浅い。

「認めたゃいなよ、心配ないさ…何せ、お前のような年頃になると、好奇心、が煩悩じみて思い上がることもあるさ。」

文中に意味不明な言葉が渋滞していた。

日本言語はこれだから難しい。けど、何となくの解釈の確認はでは最強速度。

「う、うん」

困っていると言うより、めんどくさそうな態度。

「それでなんだっけ？

梅雨さんが何かに関する情報を持ち合わせてきたって？」

持ち合わせてきた。梅雨は情報伝達網、意味の流れだとそれで決を取るとしよう。

面白い話を期待しているよ。

「嗚呼、私にそこまで期待していたの？
残念だけど、今日も至って平凡な日常しか訪れないわよ」

情報を備えると、予知すら出来てしまうのか。

「もしかして、ここまでの前置きで『事件』と言っていたのは、この事柄を意味していたのか？」

察し良く、閃き良く、観察力を活かした返答。

「勿論ね。その通りよ」

幼稚な意味では、その通り幼稚な意味だった。

確か。

懐紙（前書き）

出てきた人

死期ナ梅雨（しきなつゆ）

用駄懐紙（よだかいし）

懐紙

三種の神器とは、狂気、鬱、無情を指し示し、どの箇所が欠けていても、何かで補えるを意味している。

「意味不明だ」

不適切不毛。業界用語でも何でもない。ただの用語。

曖昧で不可実な言葉に、基準を与えでもって何の意味もない。

「みんな、いろんな言葉を知って居るよな。俺は知らない」

今日は、昨日の今日だ。昨日なら今日は次の日だ。

自分を置いて、他の人たちは、いつも通り授業中な為、一応席には付いている様子。

こう、観ているとみんな分かっているのかな？

学徒は永遠じゃないことに、そして高校生だって、何時までも高校生では無いのだよ。

昨日のことは、忘れているような気配だな…

先ほどの話、狂気と鬱と言っていた話だが、鬱までは神器といっても良いが無情はあからさまに、無理矢理だと言いたい話だ。

強引、無情にもとよく使われる単元だ。

無情とは何か？無情とは、感情空虚のこと。

感情を持たない人間なんていない。感情は芸術や美術から成り立つ。
人間の感覚器官全てをつぶさないと、そういった言葉に該当しない。

物事出来事人事、曖昧で模糊。
人の知恵の一つに数字が来る…のか。

しっかりと、曖昧でぼんやりとしたこの世界でも確実な値を出せる道具。

人類、長生きするものだ。ここまで来ると、人類まとめて一つの単体のように見えて恐ろしい。恐怖。

だけれども、数字１から１０まであっても、足りない。記号を用いても不足気味。

例えば、こんな話。

セーブデータをセーブしたい時。
『セーブしますか？』
と問われ。
『はい』『いいえ』
と並べられた選択肢が有る。
しかし、ここに現実の曖昧加減を加えると…

『セーブしますか？』

『はい』

『どちらでもない』

『いいえ』

となる。

「おい、ヒトトキ。起きているのか？目は開いてるが心は閉じてそうな感じだぞ？」

はっ、しまって仕舞った。

余りにも、今日が普通で平和ボケしてしまった。

「先生ヒドいです！
ヒトトキさんを虐めないでください！」

前にも一度、有った展開。前というより昨日。

「なんだ？お前は…あ、構ってちゃんの子子子じゃないか…なら、許すしか有りませんね」

本音、先生は俺の様子を伺っただけで、別に虐めているわけではなかった。
でも、考えて、考え深く考えると、先生が名前を挙げる行為は、周りからな視線を集めるという行為、仮にもし俺が視線恐怖症だったとしたら一大事。

そんなわけないけど。

明日は水曜日か…
そろそろ、杓文字を使ってバトル展開になっても良い頃合いだが…
そうは行くまい。

「おい、サトル。ゲーム持ってきたか？」

用駄懐紙。華かな面持ちの生徒副委員長だ。基本不真面目。成績優秀。授業態度怠り、なまける。でも、成績運動共に上位。

才能だけ無駄に持っている。
けれど、女子にはモテない。

「ゲーム？あ、ゲームね。」

昨日から、頭に何か物を乗せるのに目覚めたサトルは、今日はタオルを乗せていた。
恐らく明日は、ハンカチかポケットティッシュだろう。予感。

「あれ？おかしいな。ちゃんとタオルにくるんで居たはずなのに…」

教えてやるか、サトル。答えは墜ちた。

頭上のタオルに釘付けな俺は、それしか、無くなる方法はないと思った。

「しっかりしろよ。お前自身のゲームだぞ？
僕のだったら兎も角、お前の物だったら、こっちが残念だよ」

自分の事はどうでもいいのか？
自分の私物だったら、どうでもいいのか？

つくづく、懐紙には、驚かされる。昨日も懐紙は学校の雑用とかで、授業をサボっていたからな。

ま、頭が良ければ授業なんてやらなくても良いし、やらない方がいい。

自分の為に使うべき時間を、使った方が一番有効だからな。

「う、有ったぞ。懐紙、」

どうやら、有ったらしい。
リョックサックのような鞄から、薄いゲームパネルを取り出すサトル。

不覚にも、俺はサトルの本領知らなかった。いや知るよしもなかった。
知ることは出来た、『サトル』って名前。名前が重要なヒントだった。

「有るじゃん。無くしてなくて、良かったね。」

サトルは、電子機器に飢えている。

ほとんど、盗み聞きな立ち位置にいる俺はサトルを監視してみた。

家で何をやっているのか、殆ど皆無。
予想は付くと思うが、俺は別に嫌いではない。

だって、俺を差し置いて、一人でに楽しむことが許せなかったからだ。

ヒトトキは、貧しい家庭に育ち、何とか毎日を生きている状況だ。
これは人には内緒の、ヒトトキだけの秘密だ。だから、こんな学校

まで来ているのだ。

結構な距離だが、近代化の進むここでは、わずかに三分の差で、何処でも同じ距離なのだ。

神速機器とか言ったり、神様の乗り物だったり、人は言うけど、大した発明ではない。ただ単に登場するのが早いか遅いかの差だ。

今の俺の現状と同じ、貧しいか貧しくないかの差。
馬鹿にされるのはかまわない、けども、優しくされるのは好まない。

全国統一、冗談でも良い。上手く行かないのならそれで良い。
世の中上手く行かないのが証明できるから。

もし上手く行っても、人生そんなもん、上手く行ってしまうものと立証できる。

「先生、彼らのゲームを取り上げてください」

心無しに俺は、懐紙が手に持つゲームを指差す。
非道いのは、俺の方だ。
綺麗なのはみんなの方だ。

「？ああ、あれね。先生、懐紙さんに逆らえないから、無理」

ここは、この世界ではルールよりも権力が勝るというのか…
一つ理解した気分。

「ヒトトキだっけ？」

ゲームをしながら、首だけをこちらへと向ける懐紙。
何かを覚悟。

「いいね。ずっと、君に注意を見計らっていたけど、ずっと良い人じゃん」

黒幕は、彼だったらしい。
今日で二つ理解した、世界は才能を持つ人たちで動かされていることに…

知れないを知られる（前書き）

出た人

神灯（かなでり）　日美夜（ひみや）

知れないを知られる

擬人化して、人を殺めたいのか、戦争を起こして、人類を滅ぼしたいのか…

この本に書かれている、物語。
一見、真実にも見えるが言っていることがめちゃくちゃだ。
嘘みたいに、本当、良く出版できたものだ。努力家の面影は見える、けど、正しい物、有力加減が見えない。

「嗚呼、この本ね。結構面白かったよ。」

本を渡す。相手は、日美夜。神灯　日美夜とは、何となくの縁だ。
友達だったりするのかな？
ま、知り合い範疇の仲だ。

「次、は何だっけ？」

授業と授業の瀬戸際。つまり休み時間と言えるこの時間。
そして、次の授業タイトルを聞き出す際のジェスチャーと言葉。

「利文学」

何事も一言で済ましてしまう。圧倒的な小無口人間。通常日美夜は何処にでも居そうな文系女性。

ここで言っておくが、利文学は、魔法みたいな奇天烈文章を長々とそして淡々とまとめた瞬間理解言語だ。

別に、一般生活の要に成るほどの重要性は無いが、担当の先生が言う限り常用性が有るように聞こえるのが不思議。

「嗚呼、助かったよ。わざわざ、確認を取るために、廊下に出ることもないし…あと、お前記憶力高っ」

教室に、そういった掲示がないのが、一つのストレス。

文系と言うだけ有って、やはり、記憶力も確かに備わっている。

「…」

無口に、左手の甲を見せる。

「ん？魔術親書、壱拾七の印か？」

利文学の独特のバーコードがそこにあった。

「え？」

よく見れば、理解できる。端から見たら、単なるマークだが中三にもなった、俺たち三年生なら殆どの人が理解でき、確認する。

理解した、文は、事細かに、カレンダーと祝日、行事表、時間割り、あああ。

凄ま過ぎる情報量で頭が熱を帯びて、思考が破裂寸前まで、追い遣った感じ。

まるで、連続する爪楊枝工場の爪楊枝を頭に物理的に詰め込まれて

いるようだ。

「日美夜。冗談、痛い」

日美夜の冗談は、痛い物だと知った。

いつの間にか、日美夜は何処かへ行って消えたらしい。何処にも見あたらない。

変態質な日美夜の事だ、また何処かで監視したり、勝手に人の机の中へと本を入札するだろう。

気にしないが適当。気にするが非常。

…俺も、移動するとしよう。

学校の身なりは、至ってシンプルで南側と東側にとの二カ所にしか校舎はなく。

北西側に、学校の唯一の誇りの体育館が顕在している。見かけだけの体育館で、顕在はまさしく適切と言える。

クーラー配備の体育館。中身は、明らかに手抜き作業の賜物。

いつか、梅雨さんに、聞いたこと有るが後数年で自然陥落するらしい。没する。

体育館以外は空き地同然。何もなく、気休めの花々。プールは屋上。

トイレは二十七カ所。窓ガラスは千四百枚程度。

完全に把握し尽くしている梅雨からの情報源だ。

情報源はおかしいな言葉で、彼女の話から何となく聞き取り、何となく覚えているだけ。

サトル、懐紙から酷く避けられている感じだ。俺の発言ミスと言うべきか…

友達が消える感じ？

ま、普通、男と友達よりも女と友達が多くなるのがラノベならではだと思うが…

一つ提案がある。

あの二人組を敵に回す。

そして、勝手にバトル展開に持ち込む。勝てば、世界統一と言う快挙もまた一歩近づく。

なぁ～に、セカイ系の小説だ。きっと上手く行く。

力学が物理的力なら、人間関係は不可抗力的力。

ゲームと一緒だよ。

「取り合えず、こうだ」

メモ帳を取り出す。常時は身につけていないアイテムだが今日は水曜日だから、何となくと気分的な非物質と直感で持ち合わせている。

ケータイで文章書くの辛いな…

紙とペンで書いた方がぜんぜん早い。
この話は、ケータイと直筆との比較でそれ以外は該当しない。

「明後日、火事が起きる」

一人ぼやく。
これは、先回りの手段。今、廊下を歩いているのだが、周りに人が居ないわけではない。

絶対、少人数でも聞いている人が居る。絶対居る。

大抵の人は、変な奴…ですぐ忘れてしまう。それでいいのだ。

これは見せかけで、意味はない。
ただ、意味有り気に、意味の無いことをぼやきたかっただけなのだ。

何事にも、意味が有るといった人の言葉を信じよう。

すらすらと、メモ帳に何かを描いていく。

「意味がないのならだ…」

授業、始まり。

俺は、いつの間にか、孤独と黄昏ていた。
いつしか、言ってみたかった言葉。

この言葉を言うために、ぼやいたのだ。明後日は火事だと。
期待道理に、夢が叶った気分だ。
ラノベの世界だと信じよう。

「先生！ヒトトキが変です！」

やっぱり、反応してくるのは、真っ先にお前だよな。子子子。

「ぐがが、腹が…腹が！！！！」

下手くそな演技をする。題は、腹痛。属は仮病。

腰掛け椅子を盛大に蹴散らし、地べたで腹を押さえ、ばた足させる。

喘げなかったら、抱腹絶倒と笑い転げているだけ、

「あぁぁぁあ〝あぁ〝ぁあああ…」

まるで、この世のとは思えないその容姿。口から意味不明な液体がたらたら。

「あいつ、浮遊獣奇に取り付かれていないか？」

ここで都市伝説が耳に入る。

「…」

黙る。さっきまで自分を忘れて黙る。

「ざわざわ」

今世紀になっても、ざわざわと鳴る雑音は顕在するのか…

「済まない。何でもなかった」

体を叩き、埃を落とすフリをする。

実際に、俺は何かに取り付かれているのかも知れない。

いつも通り、授業を受けた。

勝負ごとは上辺ごと

ヒトトキは、恥をかいた。

初めからだ。初めから恥をかいていたと、そういう事だ。別に羞恥なんて、受けても結局は、時間と共に消え失せるし、一時的な何かと課題すれば、怖くもない。怖くなんかも無かったが、

「お前、さ。すごいな」

と、

授業も終わったからと言って、気軽に話しかけてくる懐紙。

何気なく、気なさそうには見えない態度で話しかけてくる。文献を片手にもち、筆箱を脇に挟んでいる姿など、幾分、可笑しな姿と言えよう。

「お前さ、頭いいくせに、何かがズレているよな。」

詰問とは、また別のただの質問。

「悪く思うなよ。俺はさ、少しばかりは、自分に自信があるんだ。だから、そう見えるだけ」

話しがかみ合わない。俺自身、おまえの方がズレていると突っ込んで欲しかったのだが、こいつは授業も聞かず、さらには周りの事なんてさらさら興味のないことに一目すら置かない。そんな奴なんだろうな。

サトルと仲がいいなんて、それだけで、奇人確定なのに…

「悪く思わないさ、お前自身…いや、本人か、本人なら他人の事など動くものだと思っていた方がずっと賢いぞ」

悪魔のような秀才生、生徒会だったか何だった知らないけど、ここは悪口めいた褒め言葉を票すに限るだろ？

「そこまで悪くないさ、人費だろ？ーただし、他人なだけだ。」

ただし、他人。人を他人と関係ないような言い分。痛い目観るだろ。こいつ、

「あ、そうだ。これも何かの縁だろ？もともと、おれがしたかったのは、混沌と沈黙だから、お前邪魔するなよ？」

先ほどの錯乱状態は、試しだ。あくまで、自尊心が高ぶるお年頃の末路ではないよ。多分、だいたいだけど。

「縁か、お前単なる、近年まれに観るあれだろよ、あれ」

縁が先に飛びついたか、定めと言ったら全国統一も図られそうだな。

ここはよし、

「勝負しないか？」

近々、こういう企画を立てようと思っていたから、良い好条件だ。

「勝負か、何を見積もる？」

賞金っていうことだよな、賞金。

考えはまとまっていなかったし、計算無しの考え無しの宣言。何がいいか…

「学校を休んでもいい、と言う賞金でよろしいか？」

一般的に不登校。強制しているのと同じ。勝者に休む権利など、微塵もないから、これは賞金がないというより、勝者に対する閥ゲームだ。嫌がらせ半面。

「学校を休むか…何上。ゾクゾクさせるものがあるな。その条件乗る」

こいつはヌケているんだな。わかる。それと同時に、当人もそれの血を引いている。

「そして、種目ですけど」

「テストなどの点数だろうな。不利有利的な意味で…」

中学生らしい。

ばかばかしいと言うより、愚かしいが何倍か適切。

こいつも俺も、義務をまだ終えていないが為に、反抗的に…何もかも、見えている全てに反抗しているのだろうな。自覚らしくものは、自覚しているがそこも反抗したいな。

「なんだ、全然普通で驚きましたよ。」

「脅かすつもりは、無かったけどな」

スポーツなんてそこそこ出来ないから、文系で遣り繰りしていた俺でも、彼に勝てない気力しか起きない。彼は才能があるから、

特別な奴。

「じゃあ、わかった。俺たちが選ばれた負け組ってことを教えてやるよ」

選ばれし、じゃ無いところがツボ。

「なら、こっちは、当たり前のように秀才な醜態を晒すとするよ」

今後のライバルか…違う。天敵だ。

サヨナラが開始の合図となる。

「懐紙、サヨナラ」

「ヒトトキ…またいつか」

同じクラスで、口も顔も合わさなくなった。それは、勝負の始まりを意味していた。

ここからだな。

次の期末試験まで後二週間ちょいあり、まだ一学期も終わっていないということを表していた。

今から頑張っても、根本的にもう手遅れと言ったところまでの成績予感と言ってもいい。非常に難解な授業の連続ともいえる。

にわかにして、どう敵を陥れるか…

そこが重大な鍵となっている。

人を使う。人は一人では生きられない同様に、人一人では何も出来

ない。
これが俺が知っていた、よく言われる世界だ。そこで、申し分有りぎる俺は、人を頼るよ。

「子子子」

シネネなら清掃委員だし、A型だから几帳面にノートマトメているはず。
それとなんだか語るのも辱めだが、友達だからだ。信用できる。

「なにー？」

好奇心と無邪気が似合いそうな彼女でも、立派に兄さんのエロい本を吟味しているのだ。拝見か、見解か、懸崖か。

「ちょっと、頼みたいことがあるんだけどさ…聞いてくれるか？」

「うん、問題ないよー」

席が移り変わって、前の席に彼女が居る配分。別に授業中だからと言う状況下で話を持ち込んだわけはない。今が授業中だから、今みたいな状況が出来上がってしまっているのだ。

「今日から一緒に、テストまですごそう。」

計算尽くしの頭が冴える一口。
開口この方一言が聞き入れたのであろう、少し強張った表情をしたが、一瞬でその緊張感を決壊させた。

「うん、いいよ～」

ノリが良い。今日の子子子は、鈍くこけているようだ。反応がなんだかイマイチ。もっと発狂とか、交えて喜んでも良いのでは、…人のことベラベラ、思うのも悪いかもだな。

「あと、本題は、勉学の方にあるから…」

遊んだりなんてできない。そこまで暇でもないんだ。戦争だから、良いことがあると信じていたら、ダメなことしか起きないのと反作用して、駄目だらけだと思う込んだら、有効な局面も見逃す。つまるところ、どっちもどっちと言うことだ。

信じないことが一番の近道と…

鋭くも何ともない言葉。どうせだれもこの言葉をろくに理解もせずに、聞き流すだろうな。

「そうね」

無愛想に成ってないか？眠いのか。

知多感じだと子子子は、こくりこくりと頬杖をずらしたり、戻したりしていた。

今の所、そっとしてあげるか…

俺は、いつもながら、勉学にははげくまなかった。

適性てき、耐性がなかったと…言えば良いわけになるけど、あの先生の授業は、麻酔粉だからな。

俺も眠くなるわ。

斜め前に懐紙はいる、斜め前と言っても、結構奥の方にいて、ここ

からだと頭しか見えない。

「あいつ、ゲーム遣ってる」

「

誰も彼に文句をいえない。そのくらい彼は、歪な力を持っているのだ。

太刀打ちできない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1571z/

わかたして。

2011年12月20日20時55分発行